

# 音楽作品と宗教

～フランツ・リストのピアノ作品に見られる宗教性～

片野 郁子

Musical Composition and Religion  
～ The Faith of Franz Liszt's Piano Works ～

Ikuko KATANO

## 1 はじめに

本研究は、作曲家の信仰・思想的な背景が作品にどのように反映してきたかを論じるものである。この研究はあまりにも膨大であるため、まず初めにロマン派最大の宗教音楽作曲家（伝記学者・エリナ・ペレンツィによる）であり、ピアノの魔術師であり、また交響詩の創始者と呼ばれたF・リストに焦点を当て、生涯、信仰・思想的背景、精神について先行研究の文献により調査し、研究対象曲の分析により先行研究の裏付けを試みた。

## 2 研究目的

本研究は、作曲家の音楽に見られる宗教性や思想、音楽作品と史実の関係について、ピアノ曲を通して研究することを目的とする。

日常、音楽は我々の周りに溢れている。筆者は、音楽を聴くことによって湧き上がる感動を何度も経験してきた。心に訴えかけてくるものを我々は何と説明したら良いのかわからない時がある。

筆者は、作曲家の神に対する讃美や、当時の詩人等からの影響をそこに強く感じる。大作作曲家の信仰と音楽に関する先行研究は大変多いが、具体的な曲の中に宗教や思想がどのように反映しているかということに絞った事例研究は少ない。多くの先行研究の文献研究と、筆者自身の楽曲分析に基づく考察により、作曲者の意図をより深く理解し、演奏に生かしてゆきたいと願っている。

## 3 研究方法

研究の方法としては、今回は晩年聖職者となった2011年現在生誕200年記念のハンガリー作曲家、フランツ・リストを取り上げ、彼の生きた時代、彼の生涯、作品の特徴について先行研究によって調べ、宗教的特性を示す根拠となるピアノ曲について文献によって背景の調査をし、楽譜分析によって音の連なりが何を意味するのかを調べた。

本稿では、作曲者に与えた多くの環境のうち、キリスト教からの影響に絞って考察する。

## 4 フランツ・リストが生きた時代のヨーロッパの出来事

リストの幼少期は、ナポレオンの活躍した時代であった。ナポレオンは、ロシアに遠征して失敗し、

1815年リストが4歳の時にはセントヘレナに流された。

リストが父からピアノの手ほどきを受け始めた6歳の時に、イギリスがインドを支配した。さらにイギリスの植民地支配は進み、各国のアジアの覇権争いは激化していた。

1829年に、パリ7月革命が勃発、また、1839年には中国とイギリスの間で、アヘン戦争が勃発した。1843年にイギリスは西インドを併合、自由貿易も推進した。

文化面では、1851年にロンドンにて、1855年パリにて万国博覧会が催された。

また、文学の面では、詩人、政治家であったアルフォンス・ド・ラマルティエヌ（Alphonse Marie Louis de Prat de Lamartine (1790～1869 フランス)）が活躍し、リストをはじめ、ビゼー、ドビュッシー、グノー、ラロ、ミヨー、サテティなどに多くの影響を与えている。⑩

例えば、彼の「詩的瞑想録」（1823年）、「詩的で宗教的な調べ」（1830年）にリストが作曲している。⑩-ア

日本では、1853年にペリーが浦賀に来航、その後、イギリスによる第二次アヘン戦争や、フランスによる植民地支配が進んだ。

1860年、アメリカでは南北戦争が勃発、1865年リスト54歳の時に北軍の勝利により終結した。1884年アフリカを列強が分割支配するなか、1886年にリストは75歳で亡くなった。⑤

## 5 フランツ・リストの一生

Franz Liszt (1811・10・22 ライディング～1886・7・31 バイロイト ハンガリー) は、ロマン派最大の宗教音楽作曲家、標題音楽の完成者、交響詩の創始者である。

1817年（6歳）より父からピアノの手ほどきを受け、瞬く間に上達し、1821年（10歳）でウイーンに移住してサリエリやチェルニーに師事し、11歳で公開演奏会を行なった。

彼は18歳で、カロリーヌ・サン・クリックとの恋を彼女の父親によって引き裂かれ、失意の生活を送っていたが、1830年（19歳）のパリでの7月革命や、パガニーニとの出会いによって目覚め、死にものぐるいでピアノに向かうようになり、パリの話題を呼ぶようになった。

1833年（22歳）には、ベルリオーズに連れられて初めてマリー・ダグー伯爵婦人のサロンに加わった。彼女は6歳年上であったが、彼女は当時パリ文学界にかなりの存在であり、ピアノも演奏した魅力的な女性であった。二人は抑えることのできない情熱に駆られ、1835年（24歳）にスイスへ駆け落ちした。このときの作曲されたのが巡礼の年第1年「スイス」である。

1837年には、長女を連れてイタリア・コモ湖畔へ移った。巡礼の年第2年「イタリア」は、この間にリストがイタリア各地で接した、イタリアルネッサンスの巨匠達の芸術作品に触発されて作曲された作品が主幹となっている。この頃、各地を演奏旅行して名声を得ている。

1843年（32歳）にマリーと別れ、1846年（35歳）でカロリーネ・ヴィトゲンシュタイン公爵夫人の恋人となった。⑩p105

1848年には、先に述べたラマルティエヌの詩に触発されて、交響詩『前奏曲』が作曲されている。

しかし、栄光に満ちた前半生に比べ、後半生は挫折感や悲しみも多かった。陰謀による、ワイマル宮廷学長の辞職、カロリーネとの破綻、あいつぐ子供の死亡、娘コジマとの仲違い、などのなかで彼は1865年（53歳）にして下級聖職者となった。この後再び、演奏活動、創作活動、ピア

ノ教育に携わり、ブタペスト音楽院院長に就任した。本稿で取り上げた『J. S. バッハのコンタータ「泣き、悲しみ、悩み、おののき」のコンティヌオによる変奏曲』は、1875年（64歳）の作である。

晩年は無償で多くのピアノの生徒の指導を行い、1885年（75歳）にパイロイトで亡くなった。  
⑤⑥⑦⑨ ⑩-イ

## 6 リストとキリスト教

多くの伝記や解説書では、ピアノの名手であること、女性関係、音楽史における交響詩や標題音楽への功績をクローズアップしてリストを解説していることが多い。しかし、ヨーロッパの作曲家が影響を受けたものは、家庭環境、文化、歴史的な環境も大きな位置を占めているが、音楽に込められたキリスト教信仰とのかかわりも大きいと述べる先行研究者も存在する。これほど音楽に大きな影響力を持って歩んできた宗教は他にないのではないだろうかと筆者も考える。

リストについても、若いころから篤い信仰をもち、聖職者を望んでいたことは多くの伝記にも記されている。さらに筆者は、リストのみならず他のヨーロッパの同時代の作曲家の内面的な部分での彼らの信仰についての記述を、カヴァノー氏の著書（翻訳）によって見いだした。

パトリック・カヴァノー氏は、以下のようにリストの信仰について述べている。

「大切にであるにもかかわらずしばしば見過ごされてきた音楽史の主題に光を投げかけるのを望んで止まない。その主題とは、眞のキリスト教信仰なのである。

- ・リストは生涯に渡って熱心なキリスト教徒であった。16歳のリストは聖職に入ることを切望したが許可されなかった。
- ・こうした信仰の情熱にもかかわらず、リストは性的放縦の生活を送り、愛人との私生児も設けたが、信仰と現実の矛盾も感じていた。」

例えばリストの手紙のなかにそれは表されている。

「リヒャルト・ワーグナーへの手紙には、次のように書いている。『私は、神がご自身の約束と愛を通して、君の心を強く照らしてくださるよう祈る。君は思う存分皮肉を込めてこの気持ちをあざ笑うかもしれぬ。だが私はこの気持ちのなかに罪からの唯一の救いを見落とすことはできないし、またそれを望まずにいられない。ただキリストを通し神にあって苦しみを甘受することを通して、罪からの救いとこの世での救済が我らのもとに来る。』

・マリ・ツィー・ザイン＝ウイットゲンシュタイン公女にはこう書いている。『神があなたをご自分のものとされ、あなたの上に恵みを惜しまれませんように。～中略～〔心を騒がせるな、おびえるな〕イエスは平安をあなたがたに残された一世が与えるようにではなく』〔ヨハネ14・27〕②p115

「音楽には深い霊性があり、多くの作曲家が強い信仰の持ち主だとわかったからといって、驚くには当たらない。ところが、大作曲家や大作曲家の伝記にこの事実が主題としてあらわれてくることはめったにない。実際何年にもわたって音楽に関する文献に目を通し、音楽を題材にした文学作品を研究したところで、歴史に残る大音楽家の個人的なキリスト教信仰については何も分からずじま

いだ。クリストファー・パークニング」②p9

彼は彼が守ろうとした信仰とは完全に食い違ったロマン主義的な考え方をもち、ダグー夫人との愛に代表されるいくつかのスカンダルによって神と教会の掟に背いたが、深い信仰を持ち、その信仰に基づいた作品を数多く作曲した。

また、J・S・バッハを深く敬愛し、バッハの作品は、リストの宗教作品が生まれる礎石として存在している。バッハに捧げる敬意によって数多くのバッハの作品の編曲を手がけた。本稿では、そのうちの1曲を取り上げ、彼の信仰の理解への一助としたい。

## 7 研究対象曲

『J. S. バッハのカンタータ「泣き、悲しみ、悩み、おののき」のコンティヌオによる変奏曲』(1875作)

### Variationen über das Motiv von Bach:

(43) 1



**Basso continuo des ersten Satzes seiner Kantate „Weinen, Klagen, Sorgen, Zagen“  
und des Crucifixus der H-moll Messe.**

**Variations sur un motif de Bach.**

(Basso continuo du premier mouvement de sa cantate:  
-Pleurs, plaintes, soucis, craintes- et du Crucifixus de  
la messe en si mineur.)

**Variations on a motive by Bach.**

(Basso continuo of the first movement of his Cantata  
“Weeping, plaints, sorrows, fears” and of the Crucifixus  
from the Mess in B minor.)

**Változatok egy Bach-motivum fölött.**

(Basso continuo a „Sírás, panasz, gond, csüggedés”- kantá-  
tából és a H- moll mise Crucifixus-ából.)

Anton Rubinstein gewidmet.

Franz Liszt.

(Komponiert 1862, erschienen 1875.)

F. L. es.



この曲は、J. S. バッハのカンタータ「泣き、悲しみ、悩み、おののき」のトランスクリプションである。「リストのピアノ曲の多くは、実際には他人の作品のトランスクリプション〔様々な編成の曲をピアノ独奏用に書き換えた編曲。釈義であるパラフレーズとは別〕である。」②p119

この曲について、背景にある聖書の言葉や、この曲が生み出される基となったJ・S・バッハの作品について調べ、リストがどんなに深い宗教観、信仰心をもってこの作曲したかを考察する。

## 背景

リストの宗教的作品は、合唱作品だけでも66作品に上り、それも小規模モテットや無伴奏コーラルからオラトリオ「キリスト」などの大規模編成の曲にまで及ぶ。1865年に聖職者となってから、教会音楽の革新を行おうとしたが、バチカンにも一般にも理解されなかった。このころの作品は驚くほど単純、素朴である。

彼は、ヴィトゲンシュタイン夫人との破局等の悲しい経験から聖職者への道を選んだが、当時のリストはやつれて顔はごつごつとし、髪は真っ白だったと伝えられている。しかし、一方たえず若返り、新たな美の探究心としての音楽への愛によって一層高められた力強く活動的な使徒の職が続けられた。

1865年より、86年までは国々をめぐって催される音楽会、ワイマールでの一時居住、ローマでの生活、ブダペストでの後進へのピアノ指導の生活が交互に行われた。

このような中で1875年、ブダペストにおいて「フランツ・リスト音楽アカデミー」が開校され、いまもなお今もなお西洋の代表的な音楽学校の一つとなっている。⑨

## 精神

この作品はこのような背景の中から、オルガンの為の作品に次いで1875年に作曲された。ジャン・シャントヴァーヌはこの作品に「夢想的メランコリーからもっとも陰鬱な不安と最も激しい絶望まで」の悲しみのあらゆる陰影を感じ取り、次のように付け加えた。「リストはこれ以上雄弁でこれ以上確固たる、これ以上穏やかな曲は書かなかった。素晴らしいことだが、彼はバッハの精神に忠実であることをやめない。」

イエス・キリストの十字架上の死がその悲痛で崇高な精神を表現しうる才能を持った二人の芸術家に一世紀もの隔たりをおいて靈感を与えたのである。⑨

構成 テーマ 第1変奏 第2変奏 第3変奏 コーダ

この作品のモチーフは、J・S・バッハの300にもおよぶカンタータより第12番（BWV12）の第2曲で合唱されるコーラルの通奏低音によっている。

このモチーフは4度音程の間を半音階的に下降するバス音形である。



J・Sバッハ カンタータ 第12番 (BWV12)

第2曲 合唱 の冒頭 編成：合唱、弦合奏、通奏低音

「よくよくあなた方に言うておく。あなた方は泣き悲しむが、この世は喜ぶであろう。あなた方は憂えているが、その憂いは喜びに変わるであろう。」ヨハネによる福音書 16章 20節

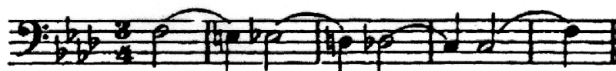
この何度も繰り返される悲痛なシャコンヌを、バッハはのちに ミサ曲 口短調 BWV 232 第17曲の crucifixus (十字架に付けられ) [ニケア信条]の通奏低音にも使用した。ここではホ短調になっている。冒頭を示す。

ラテン語歌詞 Crucifixus etiam pro nobis sub Pontio Pilato, passus et sepultus est.

日本語歌詞 ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られり

各変奏について

リストは先に示したこのバス



の上に多彩な和声進行を試みている。それはあたかも、我々の様々な苦しみ、悲しみ、背負いきれない罪を描いているように筆者には感じられる。聴く側に、単調さやマンネリ感を感じさせない。

テーマ Andante f moll であるが、VIから開始している。モチーフは右手で拡大して奏される。○印

○ D♭ C C♭ B♭ A D♭m A

Andante. ff pesante f ff pesante sf ff sf

○ D♭m C

tr. rinforz. tr. ritenuto F

dim.

第1変奏 *dolente* 陰鬱な悲しみが表現される。

第2変奏 *quasi Allegro* 激しい魂の迷いが表現される

第3 変奏 Allegro 減七和音のアルペジオが心の葛藤を表し、戦いの末十字架の救いによる喜びへと変化してゆく。

(51) 9

Allegro.  
ff

*rinforz.* *marcato* *molto agitato e sempre ff*

モチーフ

### コード

この曲の最後の部分には、コラール BWV.98 の旋律が使われている。BWV 1 2 の第7 曲としても用いられている。この曲は讃美歌 80 番（神のみわざはすべて善し）にもつかわれ、次の聖書の言葉が象徴されている。

「神を愛する人びと、すなわち、神のご計画に従って召された人びとの為には、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」ローマ人への手紙 8 章 28 節 ⑨



Choral.

Lento.

Was Gott tut, das ist wohl - ge - tan, da - bei will ich ver - blei - ben. Es

*dolce* *dim.* *p*

mag mich auf die rau - he Bahn Not, Tod und E - lend trei - ben,

\* Ra Ra Ra Ra Ra Ra Ra Ra \*

es wird mich Gott ganz vä - ter - lich in sei - nen Armen hal - ten; drum

*p dolce* *dolciss.* *sempre dolce e legato* *una corda* *tre corde*

laß ich ihn nur wal - ten. *slargando* *poco a poco più mosso*

*cresc.* \* Ra \*

カンタータ第12番第7曲 コラール

編成：合唱、オーケストラ、通奏低音

Tromba, Vln  
Soprano  
Alto  
Tenors  
Basso  
Continuo



讃美歌 80 番

父なる神 慈愛

80

Wie Gott ist, das ist wahrlicher  
Sinn der Begegnung, 1672

WAS GOTT TUT  
Seyerius Gasterke, 1675

8-28

終結部分は天国への階段を思わせ、神への信頼と感謝のうちに終わる。

*a tempo, un poco animato*

*ff*

Ra Ra Ra Ra Ra Ra Ra

S.....

*trém. f*

Ra Ra \*

Ra Ra Ra Ra Ra Ra Ra

(\*)

F.L. es.

## 8 おわりに

演奏者は、聴き手がどんな受け取り方をしようと、作曲者がどのような思いでこの曲を作曲したか、あるいはその曲を作曲するに至った時代背景、思想、信仰について理解しておくべきであるとする。

もちろん、キリスト教だけがリストの音楽に影響したとは言えない。例えば、交響詩「前奏曲（レ・プレリュード）」（1848年作）は、詩人アルフォンス・ドゥ・ラマルティエーニの、「詩的瞑想録」の一節「われわれの一生は、死によってはじめてその厳粛な第一音が奏される未知の歌への一連の前奏曲にもひとしい」に作曲されたものである。「死を原点とした場合、人生はその前奏曲である」という思想に共感して作曲されたのである。⑩ア p58 この点についても研究して行きたい。

今後にもさらにリストについての研究を深め、この研究を、筆者自身のピアノ演奏への反映によって社会に発信してゆきたいと考えている。

カヴァノー氏は、その著書の中で、様々な信仰をもつ作曲家の人物像を描いている。彼は、「作曲家の間には、キリスト教の基本的な教理の点で驚くほどの一致がみられる」「作曲家の信仰について確証はあるもののほとんど知られていない事実がある」と述べている。

今後、他の作曲家についても研究の範囲を広げてゆきたい。

## 9 参考文献

- ① 白水社 角倉一朗・高野典子共著 バッハのカンタータ
- ② 音楽之友社 バッハ大全集 第5巻カンタータ
- ③ 第6巻ミサ曲・受難曲・オラトリオ
- ④ 音楽之友社 名曲解説全集補3 Pag.79～81  
J・S バッハ カンタータ第12番「泣き、嘆き、憂い、怯え」
- ⑤ 教文館 P・カヴァノー 著 吉田幸弘訳 2000年 大作曲家の信仰と音楽
- ⑥ 全音楽譜出版社 アラン・ウオーカー著 内野充子 訳 「リスト」
- ⑦ 音楽之友社 アルフレッド・ルロワ著 泉敏夫 訳 「リスト」
- ⑧ 音楽之友社 名曲解説全集第15巻・独奏曲（中）  
『J. S. バッハのカンタータ「泣き、悲しみ、悩み、おののき」  
のコンティヌオによる変奏曲』
- ⑨ 新改訳聖書 ヨハネによる福音書 16:20 ローマ人への手紙 8 : 2 8
- ⑩ 第28回九州公私立大学音楽学会熊本大会誌 7 ピアノ独奏片野郁子
- ⑪ 音楽之友社 現代人の名曲図書室 ア p58 リスト交響詩「前奏曲」  
イ P2089 リスト
- ⑫ 音楽之友社 標準音楽辞典 p2073（ラマルティエーヌ）
- ⑬ 番町書房 津守健二 著 名曲と愛 ロマン派音楽家と恋人たち p43～p114

## 10 使用楽譜

楽譜 1

Edition Peters L I S Z T Klavierwerke Band X Pag.166～183 (1875)  
Variationen über das Motiv von BACH

楽譜 2

Edwin F. Kalmus J・S BACH Hing Mass in B Minor  
crueifix Pag.186～189

[http://www.ebach.gr.jp/kaisetsu/bwv232h\\_17.htm](http://www.ebach.gr.jp/kaisetsu/bwv232h_17.htm)

楽譜 3

バッハカンタータ第12番 BWV 12

泣き、おののき、憂い、怯え (Weinen, Klagen, Sorgen, Zagen)

<http://www.ebach.gr.jp/kaisetsu/bwv12.htm>

楽譜 4

日本基督教団出版局 讃美歌 80番

